

受けついで、伝えていく

あきやま ようこ
秋山 洋子

この巻頭言に何を書こうかと考えていた時、突然の訃報がとびこんできた。若桑みどりさん、西欧美術史・図像学の大家だが、私たちには『女性画家列伝』や『戦争とジェンダー』などの著作をもつ闘うフェミニストのイメージが先にたつ。大学を退職して「これから自由に仕事ができる」とはりきっていた矢先に心臓病に襲われた。

少し前、7月には中島通子さんの訃報を聞いた。休暇中の海の事故だった。女性の弁護士は数えるほどだった1970年代から、中島さんは働く女性の頼もしい味方としていつも裁判の現場にいた。若桑さんも中島さんも、70歳を超えたとはいえバリバリの現役、やるべき仕事、やりたい仕事を山ほど残しての急逝だった。

“この人たちがいてくれれば安心”と頼りにしていた先輩たちの突然の退場に、茫然とし、彼女たちの仕事は誰かが引き継がなければと、ハッと気を取り直す。仕事の質と量、人間としての存在感、共に巨大だった彼女たちの穴を一人で埋めることはできなくても、残った者が少しずつ力を出しあって、次につないでいなくては…。

一時期、フェミニズムが「高齢化」して、若い人たちにつながらないと心配する声があった。しかし私は、それほど心配をしていない。例えば、ここ数年、1970年代初めに起こったウーマン・リブ運動に対して、若い人たちの関心が高まっている。世代の異なる2人の女性監督が映画『30年のシスターフッド』を製作し、リブをめぐるシンポジウムや講演にも幅広い世代の人が集まる。「リブ」が「フェミニズム」になり、それが「フェミ」と略称されても、必要な状況がある限り運動は続く。時代に合わせて名前や形を変えながらも、女たちの経験は手渡されていくと信じている。

■プロフィール 駿河台大学教授。日本女性学会・中国女性史研究会会員。専門は、中国文学・女性学だが、大学では外国人留学生の日本語教育を担当している。70年代のリブ運動にかかわり、1974-81年は家族と当時のソ連の首都モスクワで暮らした。著書に、『わたちのモスクワ』（勁草書房、1983年）、『リブ私史ノート』（インパクト出版会、1993年）、『私と中国とフェミニズム』（同、2004年）など。